

## 和ろうそくのサイエンスとよろこび(後編)

京都薬科大学 名誉教授 桜井 弘

## 絵ろうそくと『赤いろそくと人魚』

和ろうそくには、表面に美しい絵を描いた絵ろうそくがあり、独自の世界を作っています。絵ろうそくを見ると、小説家・童話作家小川未明(1882—1961)による『赤いろそくと人魚』<sup>5)</sup>が思い出されます。

ある暗い海に身重の人魚がいました。人魚はこの寂しい海では生まれてくる子供がかわいそうだと思い、人間は優しい心を持ち街は楽しいと聞いていたので子供を人間の世界に預けることにし、海辺の町の神社に産み落として立ち去ります。人魚の子供はろうそく屋を営む老夫婦に拾われて、神様が授けてくれた子として大切に育てられ美しい娘に成長しました。人魚の娘がろうそくに絵を描くとたちまち評判となり、ろうそく屋は繁盛しました。しかし、人魚の娘に目をつけた香具師が老夫婦に人魚の娘を売ってくれと迫ります。人魚は不吉で、手放さないと悪いことがおこると言いくるめられ、差し出された大金に目がくらみ人魚の娘を売る決意をします。このことを知った人魚の娘は最後にろうそくを赤く染めて残します。そして、檻に入れられて連れて行かれました。その夜、老夫婦の元に青白い女が現れて人魚の娘の残した赤いろそくを買っていきますが、女が帰ったとたん嵐となり海が荒れ狂い人魚の娘の乗った船も沈んでしまいました。その後は、神社で赤いろそくを見ると災いが起きるようになりました。老夫婦は人魚の娘を売ったため神様の罰に当たったと後悔して、ろうそく屋を廃業します。しかしすでに遅く、人魚の呪いは続き、ついに町は滅んでしまったという悲しい物語です。

人間への厚い信頼が裏切られた母人魚の怒りは、どれほど激しかったことでしょうか。救いのない結末で、読者は強い衝撃を受けます。赤いろそくには、母子の人魚の魂が潜んでいたのでしょうか？

## ろうそくを愛でる

東大寺二月堂の修二会で見つた「闇」の中で灯る和ろうそくの光は、周りを照らしただけでなく、なにか神秘的なもの、幽玄的なものを感じさせてくれました。

小説家谷崎潤一郎(1866—1965)は、『陰翳礼讃』<sup>6)</sup>(1933年)で、闇を照らす和ろうそくの価値を見事に描いています。

ろうそくの灯の下では、日本の漆器の美しさは、そう云うぼんやりした薄明りの中に置いてこそ、始めてほんとうに発揮されると云うことであつた。「わらんじや」の座敷と云うのは四畳半ぐらゐの小じんまりした茶席であつて、床柱や天井なども黒光りに光っているから、行燈式の電燈でも勿論暗い感じがする。が、それを一層暗い燭台に改めて、その穂のゆらゆらとまたゞく蔭にある膳や椀を視詰めていると、それらの塗り物の沼のような深さと厚みとを持ったつやが、全く今までとは違つた魅力を帯び出して来るのを発見する。(中略)「闇」を条件に入れないければ漆器の美しさは考えられないと云つていゝ。(中略)もしこれらの器物を取り囲む空白を真っ黒な闇で塗り潰し、太陽や電燈の光線に代えるに一点の燈明か蠟燭のあかりにして見給え、忽ちそのケバケバしいものが底深く沈んで、渋い、重々しいものになるであらう。

一方、ヨーロッパでは、ろうそくの光が素晴らしい作品を生み出しました。フランスのロレーヌに生れた画家ジョルジュ・ドラトゥール(1593-1652)が描いた『大工の聖ヨセフ』(図4)<sup>7)</sup>には、漆黒の中で人々の表情を浮き上がらせるろうそくの灯の美しさが極限にまで高められて描かれています。ヨーロッパでは、火をともしたろうそくは信仰の象徴や生命のはかなさを暗示するものだそうです。この絵はキリストの父ヨセフと少年キリストでしょうか。漆黒の中のろうそくの明りのもとで、少年の無邪気そうな顔やヨセフの真剣そうな表情や力のこもった腕が美しく浮き上がっています。



図4. ジョルジュ・ドラトゥール画『大工の聖ヨセフ』

現代の生活は光に満ち溢れ、最近ではLEDランプが夜をいっそう明るくしています。しかし、現代生活から遠ざけられた暗闇を照らすろうそくとゆらめく灯を見つめながら暗闇を味わい、しばし生活の中の美を愛でる時間を楽しむのはいかがでしょうか？

[引用文献とノート]

- 5) 小川未明:小川未明童話集 改版、新潮文庫、2003年
- 6) 谷崎潤一郎:『陰翳礼讃』、中公文庫、1975年
- 7) ジョルジュ・ドラトゥール画『大工の聖ヨセフ』(1640年)、パリ・ルーブル美術館蔵 [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:La\\_Tour.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:La_Tour.jpg)

桜井 弘